



元気っ子

No 325 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

毎年恒例になりますが、私の「元気っ子」9月号は夏の甲子園の振り返りになります。第106回全国高校野球選手権大会は京都国際高校の優勝で幕を下ろしました。大会前に優勝校は「京都国際か神村学園」(←ずるい)と予想していましたが、半分当たったような感じです(笑)

今大会は低反発バットの移行期間が終了し、センバツからは低反発バット(もしくは木製バット)が義務化されました。その影響か、大会を通じて本塁打数が激減しました。比較すると2023年の105回大会では23本だったのに対して、今大会は7本です。それに伴い、各校も守備を強化したりと戦い方も変化したように感じました。仙台育英の須江監督が大会10日目の「関東第一×明德義塾」における解説で、「現代の高校野球の戦い方の中の正解の一つ、練習の手を止めて全国の指導者や子供たちに観てもらいたい」とおっしゃる通り、この試合はエラーが両校1つずつしかありませんでした。

また、タイブレークを想定した練習も各校徹底してきている印象がありました。それを象徴するかのような試合が、大会11日目の「大社×早稲田実」です。この試合は第四試合だったので、ご覧になった方も多かったのではないのでしょうか。大社は島根県代表の県立高校で、32年振りの出場です。1回戦では優勝候補の報徳学園を3-1で破りました。今大会ナンバー1右腕とも言われていた今朝丸投手を攻略して勢いに乗り、2回戦の創成館との試合も接戦をものにしました。むかえる3回戦の早稲田実とのゲームは早稲田実リードでむかえた9回裏に大社がスクイズで同点に追いつき、そのままサヨナラのチャンスを迎えました。絶体絶命のピンチに早稲田実の和泉監督はレフトの西村君を内野に入れ、内野5人シフト(写真)という奇策にでて、7-3-2(←見たことないですよね(笑))のダブルプレーで凌ぎ、延長タイブレークに突入しました。そして11回裏大社の攻撃前にベンチでは石飛監督が選手を集めて「ここでバントを決められる者、手をあげろ」と聞いたそうです。するとこの夏まだ一度も試合に出ていない安松君が手をあげ、「三塁線に決めてきます」と答えたそうです。安松君は見事なバントを三塁線に決め、ノーアウト満塁、そして馬庭くんの決勝タイムリーで大社高校の勝利となりました。勝利インタビューで石飛監督はこの時のことを「私は信じるだけだった、泣けてきましたね」と答えていました。私にとって、今大会のベストゲームがこの試合でした。(バーチャル高校野球で見逃し配信がありますので是非ご覧下さい。大社高校のチャンステーマ、「サウスポー」の音量にも注目です!)

今大会では試験的に二部制も導入されました。年々暑さが厳しくなり、選手や観客、学校関係者への熱中症対策等において、高野連を中心とした運営団体がタイブレークを導入し、更には7回制導入の検討等様々な議論を重ねられています。一方で多くの高校野球ファンやメディアがドームでの開催等の提案もされています。時代に合わせて活発な議論がなされるのは良いことだと思います。しかし、当事者は何ととっても高校球児です。高校球児がどう思っているのか、そこに一番焦点が向けられるべきなのではないかと思います。

今大会の開会式で智辯和歌山の辻主将が選手宣誓でこのように述べました。「僕たちには夢があります。この先の100年も、ここ甲子園が、聖地であり続けること。そして、僕たち球児の憧れの地であり続けることです。」この言葉が全てを語っているように感じました。この先も、球児たちの夢が壊されることなく、大会が運営されていくことを切に願います。

まだ語り足りませんが、来月からはまた保育について球児たちのプレー以上に熱く語っていきたいと思います。